



爆乳J○黒瀬サキちゃんの日♡

私は黒瀬サキ。  
○学二年生です。

私は普通の○学生の女の子とは  
少し違う日常を送っています。

パイ

パイ

パイ



「おつ来た来た。」

「サキちゃんおはよう。」

「おはようございます。」

この人は毎朝通学中の私を  
待ち伏せしているおじいさんです。

ピュッ

ヒキッ

ヒキッ



「今日も相変わらず発育が良すぎる  
エッチな身体しているねえ♥  
土日のおっぱい大きくなつたんじゃない？」

「えっと……分りません……」  
私は周りの子より少し発育が良いらしいです。

ムキムキ

ムキムキ



「絶対おつきなくなってるよー！  
ほら、ごっちに来なさい！」

「あ……はい……」

これは今日も遅刻ですね……  
先生、ごめんなさい。

ゴキッ

ゴキッ

ゴキッ

ゴキッ



「ぶいぶい。」

おじいさん家の塀の裏で  
いつも通り制服を捲り上げます。



「おおっ♥

まだいやらしい下着つけて・・・♥「

・・・おじいさんが何度もエッチな下着を私に  
贈るから、仕方なく着ているのですが・・・。

お尻

「はあっ♥はあッ♥  
やっぱり先週よりおっぱいが重くなっている  
気がするよ・・・!  
こりゃあスゴイツ・・・♥」

おじいさんは乾燥した  
カサカサな手で  
私のおっぱいを重たそうに  
下から持ち上げて  
ユサユサしてきました。

フザッ  
フザッ

フザッ



「あッ・・・♡」

「サキちゃんのキレイなお乳首・・・♡  
たまらんッ♡」

「ほッッ  
しゃがみなさいッ!」

「・・・おっ・・・♡」

*おっぱい*

*おっぱい*



「んっ・・・♡」

私がしゃがんだ瞬間  
おじいさんはすぐに  
おちんちんをおっぱいに  
挟み込んできました。

んっ

んっ



「はぁあッ♥

先週よりさらに谷間が深くなっているよ♥♥♥  
すごいねサキちゃん・・・♥  
ちんちんがおっぱいにずっぽりだ♥♥

「そっですか・・・♥

おじいさんが嬉しそうに  
おちんちんをゆっくりと  
私のおっぱいの谷間に  
入れたり出したりしています。

「んっ・・・♥

アッ

アッ



「はぁッ・・・♥  
エッチな声だしてッ・・・♥  
全くサキちゃんは本ッッッッ当ッ  
やらしい娘だよッッ♥♥♥」

「あッ♥」

さっきとは違い少し汗ばんだ手で  
おじいさんは私のおっぱいを鷲掴み、  
好き放題ピストンしてきました。

エッチ♥  
おっぱい♥  
ピストン♥  
おっぱい♥  
おっぱい♥  
おっぱい♥  
おっぱい♥  
おっぱい♥



「サキちゃんのせいでおじさん若い頃より  
ちんぽが元気になっちゃったんだからッッ!」

「責任もってしっかりおじさんの  
ゲームそのデカパイで  
受け止めるんだよッッ!」

「んッ♥はッ  
はいッ・・・♥」





「だすぞおッッッッッ」

「♡♡♡♡♡」

「♡♡♡♡♡」

おじいさんのおちんちんが  
私のおっぱいの中で  
ビクビクしています。  
おちんぽ汁♡♡熱い♡♡♡♡♡



「ふう……♡  
スッキリした……♡」

「じゃあいつも通り  
精子は拭かずに  
谷間に溜め込んだまま  
学校に行くんだよ♡」

「……はい……♡」



「じゃあさうなんじゃさう  
女子ちゃあご♡」



「うっぺきます・・・♡」

おじいさんに言われた通り、  
おちんぼ汁でおっぱいが  
べとべとの状態のまま通学しました。

学校に着きました。

今時点でもう遅刻確定ですが、

まずはおじいさんのおちんぽ汁をキレイにするために

私はシャワーがあるプールの更衣室に行きます。

「黒瀬、今日もなのか？」

水泳部の顧問の先生にシャワーの

使用許可をもらわなくてはなりません。

「はい……」

今日もシャワーを使わせてください……♡」



「あっ……♡」

「うたくお前も遅刻しちゃうから

とか言って断ればいいのによぉ♡

こんなにマン「ぐちゃぐちゃ」……♡」

先生が私のおまんこを乱暴にいじります。

「んっ♡あッ……♡」



「ほら、シャワー使いたいんだろ？  
ちやんとおねだりしろよ♥」

ほら

ちやん♥

先生はニヤニヤしながら私のおまんこをいじります。

いぢぢ

「んっ……♥」

「せ……せんせえ……♥」

せんせ

せんせ



「なんだあ？黒瀬え♥」

「シャワーを使わせてもらおう代わりに  
スケベでやらしい私のおマン」に  
好き放題種付けしてください♥」

恥ずかしい言葉を言いながら  
おしりをふりふりします。

「はあ……♥はあ……♥」

黒瀬え……♥

お前って奴はあ……♥」





「んあッ」

「おおっ」

ずっぽりハマッたなあ

はっ

はっ

はっ



「黒瀬のマン」♥

俺のチンポに吸い付いてきやがる♥  
この淫乱J〇め♥♥

先生が後ろから激しく  
私のお尻に腰を打ち付けてきます。



「先生のチンポ目当てに  
シャワー借りに来てんだろ？」

「んっ♡そういう訳ではっ♡♡♡♡♡」

「あゝゝゝっっ♡

腰を打ち付ける度に黒瀬のやわらけえ  
デカ尻がつぶれてエッロっっっ♡♡♡♡♡」

「あっっ♡♡♡♡♡」





「あッッッ♥♥♥  
激しッッッ♥♥♥」

「クソッッッ♥♥♥  
オラッッッ♥♥♥マン」締め♥  
イクぞッッッ♥♥♥

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ  
アッ

アッ  
アッ





「よし、こぼれた精子をきちんと  
掃除したらシャワーを使っていいぞ。」

「はい……♡  
ありがとうございます……♡」

この時点でもう十時です。  
急がないと……。

おは

ドキドキ



これはちよつと予想外です……  
困りました。

「はあッ……はあッ……!!  
だ、ダメじゃないか……♥  
ひ、ひとりでこんな所にいたら……♥」

「え、えつと……。」

「お、おじさんに乱暴されたく  
なかつたら……♥  
わ、分かるよね……♥  
はあッ……♥はあッ……♥」



「んっっっっ♥」

「すっっっスゴイっっっ♥  
この学校に超爆乳J〇がいるって  
聞いたことあるけど、この子だよなっっっ。  
噂は本当だったんだっっっ♥」

この人っっっ先生ではないでしょうし  
変質者ってやつですよっっっ。  
ううっっっさらに登校が遅れてしまいますっっっ。



「すいよこのおっぱい……♡  
ずっと揉みだいたいなあ……♡」

「それは困ります……♡」

「♡♡♡♡♡」

「あ、あの……」

私、急いでいるので  
早く中出ししていただけますか？」

「えっ？」



「あ、おっぱいに中出しするのが  
お好みでしたら、パイヌリでも……」

「君……。こ、こんな状況なのに  
やけに慣れてそうだけど……。  
経験人数は……？」

「経験人数つてエッチをした人の人数ですよ？  
数えてないので分かりませんね……。  
少なくともこの学校の男性の先生とは全員で、  
それ以外にご近所さん、親戚の方々……」

「ッ……。  
も、もういいからッ……!!」







「.....」

「あッ」

「ク.....クンッ.....」

「あ、もうおまんこ」

「おちんぼ汁注がれてます.....」

「助かりました。」

「これでやっと登校できる.....」

「クソツツ……!!」  
「これで終われるか……!!」

「ああッ♥♥♥」

「俺が素人童貞だからって  
舐めやがって……!!」

「私ッ♥♥♥」

「そんなつもりはッ♥♥♥♥♥」

「うるせええッツ♥♥♥♥♥」



「分からせてやるッッ♥♥  
俺のチンポに屈服しろクソビッチッッ♥♥♥」

「やッ♥♥  
んんッッ・・・♥」

「くあぁッッ♥  
すっげこのマンン」ッッ♥  
締まって・・・♥うあぁッッ♥♥♥





「はあ。。。♥はあ。。。♥  
た、たくさん出してやったぜ。。。♥」

「はいつ。。。♥  
お疲れ様でした。。。♥」

「。。。」

「えっと、まだ足りないでしょうか。。。  
私時間が。。。」

「い。。。いやもういいよ。。。  
俺もバレル前に学校出なきゃだし。。。」

よかった。  
これでやっと登校できますね。

♪

♪



登校したらずば生徒指導室に行きます。

「黒瀬……お前今何時だと思ってるんだ」

ドキドキ

「十二時です……。」

いつも通り生徒指導の先生の上に  
跨りながら、遅刻のお叱りを受けます。



「……ま、遅刻の理由は  
大方分かってはいるが、  
見過ごす訳にはいかん。」

「はい、ごめんなさい……。」

「全く……。  
ほら、いつもより遅かったから  
先生のちんぽがもう限界だ。  
早くお前の誠意を見せろ。」

「……はい……♡」

ちんぽ

ドクン

「失礼しま……す……  
んんツ……♡」

生徒指導の先生のガチガチおちんぽを  
ゆっくり私のおまんこで包み込みます。

「おっふッッ……♡」

先生のおちんぽが嬉しそうに  
ビクビクしているのが  
おまんこから伝わります。

おまんこ

おまんこ

おまんこ



「黒瀬エツ♡

お前自分が毎回遅刻する理由を言ってみろお♡」

「はいッ。。。♡私が遅刻しちゃうのは♡このスケベな身体で♡たくさんのおちんぽを朝から誘惑してしまうからですッ。。。♡」

ビしょ

ビしょ

ビしょ  
ビしょ

ビしょ



「はー♥はー♥」

俺のちんぽも誘惑して

遅刻許してもらいたいんだろあ?♥」

「んっっ♥」

反省してますっっ♥」

「はー♥はー♥」

じゃあもっとなんか

腰振れっっ♥」

「はいっっ♥」

おははは

おははは

おははは

おははは



「はッ♥あんッ♥」

激しく腰を打ち付けて  
先生のおちんぽをおまんこで  
いっぱいじゅじゅします。

「くぅッ……♥  
じゅじゅおッ……♥」

先生のおちんぽが更に  
硬く大きくなってきました。

「はあッ……♥んッ……♥」



「黒瀬ツ……♡」

先生そろそろイキそうだツ……♡」

「先生ツ……♡」

私のドスケベ淫乱おまんこに  
先生のおちんぽ汁で  
直接ご指導してくださいツ……♡」

「うあッ……♡」

いいぞッ……♡

くあッ……♡」

Big

Big

Big

Big

Big



「イクッ……♡♡♡」

「あぁっ……♡♡♡」

「アッ……♡♡♡」

「アッ……♡♡♡」

「アッ……♡♡♡」



「ふう。。。♡」

今日の生徒指導は終わりだ。  
早く教室に行け♡」

「はい。。。♡」

ありがとうございました。。。♡」

これでやっと教室に行くことができます。



四時間目

数学の授業に途中から参加・・・とはいかず、先生に言われて廊下に立っています。

ドキ

ドキ

ドキ

「今は小テスト中なんだ。

黒瀬が途中から入ってきたら

みんなの集中力が切れるだろ！

全く。。。。」

「ごめんなさい。。。。」



「お前みたいな生徒は数学の勉強なんて必要ないだろ♥  
先生のチンポを喜ばせる勉強をしろッ♥」

チンポ

おちんぽ

チンポ

「はい……♥」

先生のおちんぽを喜ばせるための  
お勉強をさせてください……♥」

「……仕方ないな♥」

「んっ♡」

「んっ♡♡♡♡♡」

「おおっ♡♡♡♡♡」

んっ♡♡♡♡♡

んっ♡♡♡♡♡

んっ♡♡♡♡♡

んっ♡♡♡♡♡

「はあ♡♡♡♡♡はあ♡♡♡♡♡  
みんなは授業を受けているんだから  
あまり声をだすなよっ♡♡♡♡♡うっ♡♡♡♡♡」

「はい♡♡♡♡♡」

「あぁッ♥

黒瀬のマン」は  
締めまりが最高だなッ……♥」

「んんッ……♥」

静かな廊下に先生と  
私のエッチな音が響いています。

「あァッ♥

とろとろできもちらみん……♥」



「みんなが真面目に勉強している間  
黒瀬お前は先生とスケベなこととして  
いけない子だなあ♥♥」

「ごめんなさツ♥いッ♥♥」

「そんないけない子には  
罰として先生の精子をたっぷり  
仕込んでやるからなツツ♥」

「んツツ♥はい♥♥  
たくさん仕込んでください♥♥」



「ああッツ♥♥♥

もう我慢できんッツ♥

黒瀬ツ♥イクぞッツ♥」

「んッツ♥

先生のおちんぽザーメン

私のおまんこに

たっぷり仕込んでくださいッツ♥」

「ああッツツ♥♥♥」





「♡♡♡」

「♡♡♡♡♡」

アッ

アッ

アッ

アッ

「ふうっ……♡はぁ……♡」

「ん……♡」

ぽんぽん

ぽんぽん……

先生はその後おちんぽを私にお掃除させました。  
私は何事もなかったかのように先生のおちんぽ汁を  
おまんこに含ませたまま、先生と一緒に教室に戻りました。



お昼休みは大抵校長室の机の下で過ごします。

「んっ♡じゅるっ♡♡♡♡♡」

「おおっ♡」

「イイぞおおっ♡♡♡♡♡」

校長先生はおっぱいでおちんぽをしごかれながら亀頭を舐めまわされるのが大好きなようです。



「コンコンッ。」

「失礼します。校長」

「お、教頭先生。すまないねえ昼休み中に」

「いえいえ、」

「早速ですが〇〇の件について……」

校長先生は昼休み中私がおちんぼを  
ご奉仕してる間に必ず誰かを呼び出します。  
今日は教頭先生(女性)ですね。  
バレないようにしないと……。



校長先生が私の頭をおちんぽに押し付けます。

「んっ♡」

「これはもっとうっとうと舐めるとどう合図です。」

「はっ♡んっ♡」

「れるっ♡♡じゅるっ♡♡じゅるね♡」

「おっ♡ふう。。。♡」

「ん？どうかされましたか校長」

「いやっ♡なんでもないっ♡  
続けてくれっ♡♡」



「LOOKS〇〇が〜」

「ふむ。。。♥ふっ。。。♥」

「んっ♥じゅるるっ♥」

校長先生のおちんぼがびくびくしてきました。

「以上です。」

あと〇年の黒瀬サキについて  
複数の女性教師、女子生徒から  
クレームが来ています。」

「っ。。。♥」



「おっ♥おおっ。。。♥」

「あの生徒は問題があり過ぎます。  
男性教師の方々はあの生徒に甘い気がしますし。。。  
校長、どう思われますか。」

「そっちなッ♥」

「私から直接指導しようッ♥♥」

「おっっ校長自りですか!」

校長先生の手がぐいぐいとおちんぽを私の口に押し付けます。



「んっっ♡じゅんじゅんっ♡」

ビクビクと射精したがっているおちんぽを  
激しくおっぱいでじごきながら  
亀頭を舐め回します。

「おおっっ♡任せなさいっ♡♡♡」

「んっっ♡♡♡じゅんじゅんっ♡♡」





「ん。。。あ。。。もういいかい？  
教頭先生」

「あっはい。失礼しました。」

「。。。」「滴残らず絞りつくすんだぞ♡」

「んっ♡はいッ♡」

「じゅんんんんんんんん♡♡♡♡♡」

「おおっ。。。♡んうっ。。。♡♡」



「んっ♡ごくんっ♡♡」

「。。。よし、飲んだな♡」

「じゃあまた明日にでも頼むぞ♡」

「はい。。。♡」

校長先生のおちんぽ汁は  
しばらく喉に絡みつくのでちょっと困ります。  
にしても私、問題児ですね。。。。  
うう。。。。



午後の授業は体操着に着替えて体育です。

「おおッ  
良い締めりだぞ黒瀬♡」

「はッ♡んッ♡♡♡♡♡」



「本来であればお前も通常通り  
授業に参加すべきだが♥  
お前が運動するとデカパイが  
ぶるんぶるん揺れて  
男子生徒に悪影響があるからな♥」

「あッ♥♥♥んん♥♥♥ッ」

「お前は先生がみっちり個人指導してやる♥」



「ほらっ♡  
先生に縛られて後ろから  
突かれるのはどんな気持ちだ？  
黒瀬♡」

「んっ♡  
恥ずかしいっ♡ですっ♡♡♡」



ぴん♡

ぴん♡

「でもお前まんこは  
濡れ濡れびちゃびちゃだぞ  
これはどういことだ!♥♥」

「それはッ。。。♥  
私が縛られて興奮して  
先生のおちんぼが  
気持ちいいからですッ。。。♥♥」





「可愛い♡♡♡」

「お前は本当にドスケベだなあ♡♡  
思いつき先生のチンポで  
お前のドスケベおまんこ突いてやる♡♡」

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぴんぽん

ぽんぽん

「♡♡♡♡♡」



ピストンが激しくなると  
先生のおちんぼが  
私のおまんこの奥で大きくなってきました。

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん

ぽんぽん



「んあアツツ」

「んあアツツ」

「んあアツツ」

「んあアツツ」

「んあアツツ」

「んあアツツ」

「んあアツツ」



「おおッ♡♡♡♡♡  
でる♡♡♡♡♡  
精子絞りとりれる♡♡♡♡♡」

「はッ♡  
んんんッ♡♡♡♡♡」

狭くて暗い体育倉庫は  
私と先生の体液の臭いで  
充満していました。  
お掃除しないんですね。

放課後です。

放課後は3階奥の人がめつたに出来ない職員トイレで、一時間おっぱいを出して待機するという決まりがあります。



「く、黒瀬ッ♥

失礼するよッ♥

「はい、〇〇先生」

↑おっぱい

↑おっぱい

「はー♡

黒瀬のおっぱいスゴツツ  
たまらんツツ♡♡♡♡

「今日という日をどれだけ  
心待ちにしていたかツツ♡♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡



普段授業で関わらない先生を  
放課後の職員トイレでご奉仕するのが  
私の放課後の決まりなんです。

どういったルールで来る先生が  
決まるのかはよく知りませんが……

あはは  
♡

あはは  
♡

あはは  
♡

あはは  
♡



「黒瀬は今日もいろんな先生に犯されたのか?♥♥」

「は……はこ♥」



「くそーーーー♥

どんどんヤバいエロい身体に  
成長してるもんなお前♥♥

「あっ♥

「来年はお前のいるクラスの担任になって  
犯しまくりてえ〜♥♥♥



「あークソツツ♡♡

だめだツツ♡もう我慢できんツツ♡♡

「んっ♡」

「黒瀬のおっぱいに思いっきり  
中出しするからなツツ♡♡

「はっ♡はいっ♡♡♡♡

ドキ  
ドキ

あはは♡

あはは♡

あはは♡

あはは♡



「イクッッッッ」

「♡♡♡♡」

「エ」

「ア」

「ア」



「ふう~~~~~♡♡♡」

。。。よし♡

「便器精子で汚れてたら掃除してから帰れよ♡」

「は。。。はい。。。♡」

「こうしてあっという間に

学校での一日が終わります。



「今日も帰りが遅くなってしまったし、公園の方の裏道を通って帰りましょう。」

。。。

「。。。来たぞツツ！」

「おいガキツ！大人しくしろよ！」

「えっ？」

突然目の前が真っ暗になりました。

（。。。今日は変質者さんによく会う日ですね。。。）

「んっ♡」

「うおっっ♡この子フェエラうまっっ  
しかも想像以上のデカパイ♡」

「まんこの締めりもやべえよ♡♡  
ケツもでかくてハメ心地最高だわ♡♡」

「んっっ♡♡」

フェエラ

じゅぽっ

んっんっ

10%

10%

フェエラ

んっんっ

「町で噂の爆乳J○  
生ハメレイプ最高♡♡」

「んっ♡んぐっ♡♡♡♡」

「俺今までで一番興奮してつかもw」

「俺もw」

「んっ♡」

「じゅぽっ♡」

「んっ♡んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」



「あ〜〜♡♡

このガキマン」まじでヤツベ♡♡  
俺のデカチンが奥までずっぽり♡

「マジで?w

早く俺もマン」にハメてえ♡♡

「焦るなつてw

このガキ全く抵抗しねーでむしろ感じてるしw  
金玉空っぽになるまで犯しまくろうぜ♡

「んっ。。。んうっ♡

「ヤバツツw

「マジ最高♡♡

じゅぽっ

んんん

10%

10%

んんん

んんん



「あ——♡」

てか俺そろそろイキそう♡  
興奮しすぎてマジやば♡♡

「俺も♡♡」

このガキの子宮の一番奥に精子ぶち込むわ♡♡

「んっっっっ♡」

んっんっ

10%

10%

んっんっ

んっんっ

んっんっ

んっんっ

んっんっ

んっんっ



「……あ——♡」

「俺もう『発まん』にハマるわ♡」

「じゃあ俺次撮影するわーw」

「んううッ♡♡」

結局開放されたのはこの変質者さん二人のおちんぽ汁が出なくなるまででした。といつてもそこまで時間はかからなくてよかったです。早く帰りましょう。

じゅぽっ♡

んんん♡

10%  
10%



帰宅後、両親のいない私を引き取ってくれたおじさんに今日一日あったことをお話しします。

「サキちゃん、今日はどうだった?」

「今日は変質者さんたちに犯されたりして、いつもよりたくさんのおちんぽをご奉仕しました♥」

「そっか。。。♥」





「サキちゃんは日に日に  
ドスケベな身体に成長して  
いるからね♥  
この身体を生かすために、  
これからも毎日みんなの  
おちんぽをご奉仕するんだよ♥」

「はい、おじさん♥」

「じゃあいつも通り  
おねだりして〜♡」

「はい・・・♥  
サキのドスケベおまんこに  
おじさんのデカちゃんぽで  
ハメハメしてください♥」

おまんこ

おまんこ

おまんこ



「サキッ・・・♡」

「あぁッ♡」

○年もの間、  
何度もおじさんのおチンポに  
ハメハメしてもらっているので、  
私のおまんこはおじさんの  
おちんぼ型になっていて  
どのおちんぼよりも  
一番気持ちよくなっています。

おまんこ

おまんこ

おまんこ



「あッ♥♥♥♥♥」

「おじさんのおちんぽ  
気持ちいいかい?♥」

「はいッ♥♥♥  
おじさんのおちんぽが  
一番ですッ♥♥♥」

「嬉しいよ、サキちゃん♥」

ゴッゴッ  
ゴッゴッ  
ゴッゴッ

ゴッゴッ

ゴッゴッ



「あッッ♥

もっもっ♥♥

もっとサキのおまんこ  
突いてください♥♥♥

「サキちゃんは欲しがりだな♥♥」

「ああッッ♥♥

「あゝッッ♥♥♥」

ぽんぽん  
ぽん  
ぽんぽん

ぽんぽん



「イクツツ♥  
イキますツツ♥  
イキそうですツツ♥」

「もうかい?♥  
仕方ない子だなあ♥」

「ごめんなさツツ♥  
あツ♥  
イクツ♥イクラツツ♥」

「くツツ♥  
締め付けがツツ♥」

ゴキウ  
ゴキウ  
ゴキウ

ギザ

ゴキウ



イクッッッ

マァァァ

オレオレ

オレオレ



「・・・よしよし♥

サキちゃん、いい子だね♥

明日もがんばろっか・・・♥」

「・・・はい・・・♥」

こうして私の一日は終わります。  
また明日も私はたくさんのおちゃんぽを  
ご奉仕することになるのでしょう。

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

END



総集編追加CG  
～サキちゃんの搾乳ボテ腹H～



「今何呢？」

「ヌルッ…ゴックン…おっぱい…」

グワッ  
グワッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

ゴクッ  
ゴクッ

「ふむ…」





「おじちゃんのおちんちんは  
すっごく大好きです♡♡♡」

「サキちゃんのおっぱいミルク  
たくさん絞れそうかい?♡」

「びゅうびゅう絞れます♡  
♡♡♡」



「おツツ♡おツツ♡ほツツ♡」

「ちんぽに集中しすぎたツツツ♡」

手動搾乳機なんだから

しっかり手を動かさないとツツツー!!」

ズハハハ♡ズハハハ♡ズハハハ♡

「おツツ♡」

「おとつをこらハハハ♡」

はん

お

お

ツツ♡

お

お





ビバビバビバビバビバビバビバビバビバ

「おおおハハハハハハ」

カッ  
カッ  
カッ

ハハ

ハハ

カッ  
カッ  
カッ

ビバビバビバビバビバビバ

ビバビバビバビバビバビバ

ハハ

ハハ

ハハ



「ふう・・・♡」

今日もたくさん絞れたようだね♡

すごいよサキちゃん♡

明日も頑張ろうか♡」

「はいっ・・・♡」

